ストックホルムはお好きですか？

＜Bulletin に寄せて＞

K.

加　納　登

そう、だれかに突然聞かれたら、あなたならなんと返事をしますか。

いつかある日、速く手を動かせば動かすほどお金が入ってくるという仕事を、目の色をかえてやっていました。

そこはコペンハーゲン郊外の、吹曝しの、つぶれかかった工場の中でした。そこには、ヨンとかヴィブカという名前の、垢のないきれいなデンマークの若い衆や、内職の奥さん方が働いていました。そのほかには、アラビア人やインド人やイタリア人や、旅行の途中お金のなくなった私などが働いていました。どんなに気高い人も、そこで働くからにはお金には目がなくて、自然と手はできるかぎり速く動かすように努力することになり、そうなると、わきめもふらずに目はギラギラと色をかえて光りだすわけでした。

しかし、それも何時間かつづけると、のぼりつめてパンクして、手をとめて二枚の紙の間に別の一枚の広告ビラをはさんでいくというような、一見くだらない仕事を、せかせかと一心不乱に同じようにやっている同僚をながめまわし、そのこっけいさに自分を見るようで笑えてきたものでした。裏からふきそうじをする家庭の主婦のように、せっせとまだつづけてやっている男たちのところに行って「奥さんご精が出ますね」と、ちょっかいをかけたくなるのです。

だからそんなある日、休みにストックホルムに行ってきたアブドゥル・ガネムに、スエーデン美人はどんなあんばいだったか聞きたくなって、彼の国の椰子の木や砂風や、らくだなんかとは縁のなさそうなことを一心不乱にしている彼の仕事台のところに行って、おしりをぷいとつっついて聞いたものでした。

「ユーライク　ストックホルム？」

そうすると彼も手をやすめて、アラブの国でお尻をつねるなどということは最大の侮辱なのですが、ここはデンマークですから怒ってもしようがないうえに、彼はもともと愛嬌のあるいい人間だったものですから、お尻にうけたショックには、びっくりして飛び上がっただけで、こんなことに目の色をかえてやっていたのをみられて恥ずかしそうに向きなおり、一服する気になって、にっこりしてストックホルムの日々を思い出しにかかりました。

そのとき私は、不覚にも、というよりすこし前からその気配がして、ぽくぽくと美しくもあつかましい玉が、大腸の内壁を下がってきていたのです。それが熱してそこで失礼にも出てしまいました。

彼の花咲くストックホルムの思い出も消し飛んでしまいました。

それからというもの、ストックホルムという言葉は、あのにおいの玉の代名詞になってしまいました。そして機会のあるごとにわざわざ便所に行ったり、うやむやにしたりせずに、同僚にそうやってストックホルムの玉を、ストックホルムの好きそうなだれかかれかに、元気よくさしあげて解決するようになりました。

ストックホルムが好きかどうか聞いて、嫌いだといった人にも、本当のストックホルムはこんなんだと教しえてあげる、という屁理屈を作ってもいいわけですから、問題はありませんでした。逃げてまわる人には追いかけていっては、大小のストックホルムをおしつけるようになりました。

二十四時間のうちにちらばっていたものも、解放区をみつけたためか、らい麦パンや濃い牛乳のせいか、その工場でよく出たものでした。新入りには工場じゅうの期待をもって、その質問が発せられました。なにも知らないきのうきたアブドゥルの友人とか、ナポリ人のひっぱってきたミラノ人とかは、にやにやして待っている悪い連中のたくらみも知らずに、きまじめに「物価は高いけど……」とか、「十四才の美人に招かれた……」とか言いはじめるのですが、いずれ、無礼くさい音とか、厚みのあるにおいが、大笑いとやってきて、わから

されるというはめになってしまうのでした。そしてどうにもならずに、ストックホルムとはあのことだと頭に確かにたたきこんで、これからは用心しなければという顔をして、再び、大臣とかギャングとかいった男らしそうな仕事にあこがれる人にとってはほど遠く屈辱的なアンタッチャブルな仕事に、しおしおと向かうのでした。

そんなある日、また私はパンクして大声で歌を歌いだしました。

「ヤングワン　シュドントビー　アフライド……」

アメリカ植民地化にのせられて育った私は、歌うとすればそんな歌がでてくるのです。それを聞いたアブドゥルが、尻尾をつかまえたといわんばかりに、

「アフライド！なんとばかげた男だ。英語もろくに知らないダーティジャパニスカ。アフライド！てへっ。ひどいもんだ。アフライドではなくて、アフレイドだ、教えてやらあ」

と、心から軽蔑をこめてさけんだものでした。いやアフライドだ、いやアフレイドだといっているうちに、彼もわけがわからなくなってしまったようでした。外人の二人にとってラでもレでもそんなことは当面どっちでもいいことだったのですが。なにぶん手はいそがしくても、口の方はひまだったものですから。

いいと思っていたものが悪かったり、そうであると思っていたものがそうでなかったり、悩ましいことがいっぱいあります。

いつかアフガニスタンで、ゆきずりに米国のピースコーの青年に会いました。これはピースコーポレーションかピースコンプリチンか、そのころ私はさっぱり知らずにいました。なんとなくみなが、「あの人はピースコーだ」とか「ピースコーの人は」とかいうものですから、そんな名前の人々がいて、アフガニスタンやインドやヒリピンにちらばって、なにか国からお金をだしてもらって、力のある地位をもらってなにかを教えたり、われわれのような自前の旅行ではなく、こんなものめずらしい土地をなにか理由のある旅行をしたりするのだ、ぐらいにしか知りませんでした。そして社会一般に正統的なその生活に自分が旅行中こまったりしたときなど、自分の別の気楽さはたなに上げて、うらやましく感じたりしたものでした。

なにせそのピースコーの米国青年は、アフガニスタンの学校で英語を教えている人でした。その人の立派そうな体格や、ほこりっぽくない背広姿や、堂々と自信のある態度や、言葉の力強さに、長い間、ろばのいななきや、砂ぼこりで忘れていた、ドリス・デイとか大型冷蔵庫とかケネディといったものを思いおこさせられました。

またずっと後になって、ネパールで若い看護婦さんが、南洋の土人にパンツをはかせてまわった宣教師のファイトで、おそわったことを信じこんで、一所懸命、白がいいということを、黒がいいと思ってきた人に教えてまわっているのにであいました。私からみれば、その国の人が長年やっている黒のやりかたの方がいいように思えたりしました。

アフガニスタンはほとんどみなゆったりした、アフガニスタン服を着ていますが、カブールでは、（これもカーブルかケーブルかはっきり知りませんが）、この国でいちばん大きなこの町では、お金のありそうな人や学生は洋服を着ているのがめだちました。ですからこの町の公園で歩きつかれ休んでいて、アフガニスタンの学生に話しかけられたときに、どうしてあなたはアフガニスタン服を着ないで、洋服をきているのか聞きました。

よれよれになっているけれども、手入れをしてだいじに着ているらしい背広の上衣やズボンをつけて革靴をはいているその十四、五才の学生は、アフガニスタン服を着て学校に行くとおこられるのだといいました。アフガニスタン人の校長や何人かの米国からきた先生から、学校には洋服を着てくるようにいわれるのだそうです。

いつか会ったピースコーの米国青年が、その学校の先生だったかもしれないなあと思いました。

カブールにやっとついたときは、ほこりまみれでした。一息ついて、たぶん屋台のおやじさんか小僧が、手で気狂いになるぐらいにまわして作ったような、はえの足あとやごみのまじったアイスクリームを食べたり、羊肉のひき肉のくし焼きにしたものなど食べると、ゆったりした気分になりました。

夕方、四階ぐらいの高さの宿屋の窓にすわってのんびりしていました。乾燥した土地の夕ぐれは、温帯に育った私には、頭がくらくらするほど魅力的な光がただよっていました。ぼんやりながめていると、急におもしろいことをみつけました。

下の通りをいききするアフガニスタンの人々の動きに、二通りあるのに気づきました。さっさと歩いている人と、そうではなくて、ふわふわと歩いている人の二種類にはっきりわかれていました。その間にろばとか荷車とかや、たまに古ぼけた自動車が動いているのです。

おもしろいことに、さっさと、歩いている人はみんな洋服を着ているのでした。ふわふわ歩いている人は、みんなアフガニスタン服をきて歩いているのでした。光も空気も街なみも、ぶうぶういいながら走る古ぼけた自動車さえもふわふわしている中に、さっさと攻撃的に動いているものはとみると洋服を着た人だったといった方がいいかもしれません。

とてもおもしろくなって長いことみていました。そして、たぶんあれはゆったりしたアフガニスタン服をきていると、男の前のぶどうの房が歩くたびにぶらぶらゆれるからそれをいためつけないようにだいじにかわいがりながら、ゆっくりふわふわ歩いているのだろうと思いました。洋服を着ているとぴったりして、ぶどうの房はないも同然ですから、走ろうが、さっさと歩こうが気にならないから、あんなふうに歩けて、こんなちがいがでてくるのだろうと思いました。

アフガニスタンの乾燥した空気や青い空に酔っぱらっていましたから、私の頭はとても澄んで、すてきなことや世の中のおかしみがふだんよりもよくみえるような気持でした。そばにいたフィンランド人のエスコ・ナスカリは私よりももっと酔っぱらいで、私のこの発見に夢中になってながめながら、ほれ洋服がきた、ほれまた洋服がきたと、はしゃいでたのしみました。全体がふわふわした中で、それはほんとになにか違ったこっけいな動きにみえたからです。

洋服を着てさっそうと歩いている人は、もしかしたら時代の先端をいってその金力や知力を誇って得意だったかもしれませんが、ほこりだらけになってはるばるここまできた私にとっては、アフガニスタン服の方がずっと異国的で目をたのしませてくれることはもとより、いろんなものと調和がとれていて、へんちくりんではなくて、とてもずっと美しいように見えました。

ネパールで、日本から昼も夜もはきづめできたズボンが、どろんこ道ではすそがよごれてしまうし、山坂道ではすそとすそがからんで山靴でもはいて靴下の中にすそを入れでもしないと、ころんでけがでもしそうなうえに、ついにほころびやつぎはぎをつくろってもつくろっても破れてきて、はけなくなって、それは夜寝るときのまくらにすることにして、ネパール服を新調しました。

長い上衣は前やうしろのすそがヒラヒラと風に舞っていい感じでした。きもののように前で合わせてひもでむすびます。

ズボンは胴まわりが一・五メートルもあって、足首のところは細くなっていました。胴のところにひもを通してしぼってむすぶのです。胴まわり七〇センチの人が、一・五メートルもの胴まわりのズボンをはくのですから、あまった分は前やうしろによせられてひだになり、中でぶどうの房やお尻がゆったりして、自由にブラブラできるのです。その下は申又式のパンツです。

だからあなたのボディにフィットするスリムなビキニブリーフをはいて、ヤングファッション大バーゲンで買ったスポーティなキャンパスルックのコットンパンツなどをはいているのと、ずいぶん違った感じになってくるわけです。

ふつうの洋服のズボンならば一〇センチかそこらぐらいの布切れしかぶどうの房にくれてやらないのに、ネパールの服のズボンでは八〇センチか、大きい人ならば一メートル近くもそのために与えるわけです。それだけぶどうの房やお尻に、日々の生活がささげられているわけですから、歩き方や顔もかわってくるのでしょう。

このネパール服のズボンが洗濯されて、川のそばの草の上や、枝にかけてほされているのに出くわしたときは、とてもおかしくて笑いだしたものです。洋服のズボンならばぬいで広げても人の下半身の形をしていますが、これはふだん着ているとどうもありませんが、ぬいで広げると前のところがばか大きくて、ゴリラのパンツのようにみえて、まるで、ものごとの陰になっていた世の中のしくみが、光り輝く太陽にさらされているのをマジックでみせられるようで、風にひらひらしているのはすばらしいながめでした。こんな大きなゆったりしたズボンをはいていると、ぶどうの房やお尻のもつ意味というか、力が表われ出てきて大げさにいえば、世界が違ってみえてくるような感じになってくるのです。

だから歩いたりすわったりするときの船のへさきのようなものが、鼻や手やきりりとした目だったりするのが、こんなふわっとした服をきると、ぶどうの房がまず風をうけて、船のへさきのようなものになって、世の中が理屈の前にもっと力強いおもしろいものでおしわけていけるように感じてしまう服でした。だから、ふわふわ歩くことになるのかもしれません。

じじつアフガニスタン服を着たりネパール服を着たりして歩いたり生活している人の顔は、どの顔も洋服を着ているアフガニスタン人や日本の人たちにくらべて、ずっとなにか自然的に別のたのしみの世界のうちにいるような顔をしているようにみえたものでした。

ブレチン万才！　（のぼりべつクマ牧場）